

献身的ロータリアン群像

特別記念講演 「献身的ロータリアン群像」元R. I. 理事 松本兼二郎君

卓話者紹介 右田道夫君

講演者の御紹介を致します前に、お断わりを申し上げておかねばなりません。元R. I. 理事松本兼二郎さんがお話し下さる筈になっておりましたが、お電話がありまして、どうもこのところ、体の調子がおかしくて、無理して熊本にいても、旅の途中不測の訴えでもおこれば、かえって皆様方に御迷惑をおかけする。従って申しわけないけれども、私の講演の原稿は送るから、どなたかパストガバナーの方に代って御講演をお願いしてはくれまいか。と御相談がございました。結局、松本パストガバナーから、向笠パストガバナーにお願いしていただいて、向笠パストガバナーは快くこれをお引受け下さいました。何しろ、一両日あとに迫っています特別講演のことでございますので、私共もはらはらしておりましたけれども、向笠パストガバナーの御好意によりまして、ほっとした次第であります。向笠パストガバナーは、昭和13年、九大医学部を御卒業になり、その後、中津市で精神科の病院を開設、ロータリー歴といたしましては、昭和32年、中津クラブに入会、幹事、会長、クラブの要職を歴任、1967年、昭和42年には、当時の第370区の地区ガバナー就任。現在は、アジアの第3ゾーンを代表いたしまして、国際ロータリーの理事の要職にあられます。日本はおろか、世界のロータリーの指導者として御活躍中でございます。ただいまから、「献身的ロータリアン群像」と題しまして、向笠パストガバナーの御講話を拝聴いたしたいと思います。

特別記念講演「献身的ロータリアン群像」 R.I.理事 向笠広次君

ただ今、御紹介がありましたように、松本さんからお電話をいただきまして、本日の演題は「献身的ロータリアン群像」というのでございますが、日本で献身的ロータリアン群像と申しますと、松本さんもその一人でございます、私の敬愛する松本さんの書いて下さった原稿を私が代読いたしますことは、私にとって非常に光栄でございます。読ましていただきます。

熊本南ロータリークラブ創立20周年

祝賀式典記念講演

昭和53年9月3日(日)

献身的ロータリアン群像

松本兼二郎

この度熊本南ロータリークラブが創立20周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。創立以来20年間一途に奉仕の道に精進して来られました実績はまことに貴いと思います。これから後も、更に30年、50年と、末長くこの実績を伸ばして戴きますよう、切にお祈り申し上げます。

本当におめでとうございます。

扱て、今日の私の話は「献身的ロータリアン群像」と題しましたが、話を始める前に、この題名を思いつきましたいわれについて少し説明をしておきたいと思ひます。

私は今から2年半ばかり前に、ニュージーランドの元R. I. 会長、ハロルド・トーマスの書いた

「ロータリー・モザイク」という本を読んで大変深い感銘を受けました。そうして、この本は是非広くわが国のロータリアンの皆様にも読んで頂きたいと思ひましたので、直ちに原著者の承諾を得て翻訳に取りかかりました。そして昨年の9月、同じ「ロータリー・モザイク」という書名で、ロータリーの友の事務所を煩わして出版したのであります。皆さんの中にも既にこの翻訳書を読んで下さった方が、或はいらっしゃるかもしれませんが、実は今日の演題は、この本の名前の由来となっている、原著者の考え方から思いついたのであります。それを説明するには、原著者の言葉を借りるのが一番いいと思ひますので、その大意を

お伝えしたいと思います。次に申し上げるのは、ハロルド・トーマスの言葉の大意を、私なりの言葉で申し上げるのであります。

“ロータリーは周知の如く、1905年にシカゴにおいて誕生して以来70年余りの歳月を経て、今日のように全世界にその指導力を発揮するまでに生長したが、その間幾多の変遷を経て進化し、向上し、発展したのである。その陰には何万、何十万という多くのロータリアンの献身的奉仕と貢献があつて始めてこれを成し遂げることが出来たのであつて、決してひと握りの優れたロータリアン達のみ力だけによつて出来たものではない。

“それは恰もモザイク、即ち寄木細工が、小さな木片、大きな木片、或は種々様々な形の、数限りない沢山の木片によつて作り上げられているようなものである。その中のどの一片を取つて見ても、その一片が他のどの一片よりも、より貴重だということも出来なければ、また、他のどの一片よりも価値が少なくとも云えないのだ。各木片が各々その所を得て始めて全体の寄木模様を見事に作り上げることが出来るのである。

“ロータリーにおいても正にその通りであつて、ロータリーというものは、年々歳々、全世界の全ロータリアン一人一人が、撓まざる精進、努力と、その寄与貢献によつて作り上げたもの、従つてその功労は70有余年に亘る全世界、全ロータリアンの奉仕に帰すべきものである。”と、このような意味のことを云っているのであります。

勿論、全ロータリアンをしてこのような奉仕の実践に奮起せしめるに至つたについては、創始者ポール・ハリスの人格とその指導力の大きな影響があつたればこそでありますけれども、今私が大意をお伝えしたハロルド・トーマスの言葉は実に名言であると思つた。

このような意味の、ハロルド・トーマスの言葉を読んで私はつくづく思うのでありますが、今日のロータリーというものが、このようにして出来上がり、このようにして人間社会のお役に立っていることを考えますと、われわれロータリアンたる者は一人として安閑として惰眠をむさぼつては行かないと思うのであります。

例えば、ボートレースに例を取りましょう。ボートレースにはいろいろ種類がありますが、エイトの場合について申しますと、8人の漕ぎ手が、全員全力を尽して漕ぎ、コックスがベストを尽し

て舵をあやつることによつて、始めてそのボートは最高のスピードを以て、最善のコースを進むことが出来るのであります。

皆さんもご承知のように、8人の漕ぎ手の中には整調という、漕ぎ手の中のリーダーが1人おりました、これがコックスの指示を受けて、他の7人の漕ぎ手の総力を、時と場合に依つて、一定のテンポとリズムに乗せて、最善の総合潜力を結集するのであります。その間1人の漕ぎ手と雖もその手をゆるめることは許されません。

ロータリーの推進も正にこれと同じ道理であります。今日80万を超える全世界のロータリアンが一人残らず奉仕の理想に向かつて、日夜その全力を注いでこそ、今日までにロータリーが収め得たと同じ効果を、今後も引き続き挙げて行くことが出来るのであります。

ボートの8人の漕ぎ手の中、もし1人でもその手をゆるめ、或はコックスがその任務を怠つたとしたらどうでしょうか？ ボートの足並は忽ち乱れて、スピードは急転直下するでありましょう。その手をゆるめた漕ぎ手はそれを知つて平気でいられるでしょうか。死んでも漕ぐ手をゆるめてはならないと覚るに違いありません。任務を怠つたコックスとて同じであります。

9人に1人の場合はそのように誰にでもはつきりと判ります。しかし、ロータリーのように80万人に1人となると、それほど敏感には感じられないかもしれません。しかし、理屈は同じであります。それをよく考えて見て頂きたいと思つた。

コックスの役割、整調の役割もロータリーの場合によく当てはまります。R. I. 会長、R. I. 理事会、地区ガバナー、クラブ会長、クラブ幹事、等々が、それぞれコックスや整調の役割に相当するでありましょう。しかし、これらの人々の役割が一般ロータリアン一人一人の役割よりも重要だとは決して云えないこともボートレースの場合と同じであります。唯違ふのは役割の種類が異なるだけです。これもボートの場合と同様であります。ロータリアンはすべてここに思いを致すべきであります。

今日の講演の題名に選んだ「献身的ロータリアン群像」は、今日これから申し上げる話の内容から申しますと、ボートならさしづめコックスや整調に相当する人々を意味することになりますが、全世界80万のロータリアンは一人残らず献身的ロー

タリアンである筈であります。少なくともそうでなければならぬ筈であります。

全世界80万ともなれば、その中の一人はボートの場合のように9人に1人とは訳が違います。しかし、理屈は同じであります。無関心なロータリアンは、他の799,999人に対して「居ても立ってもいられない」ほどの申し訳なきを感じないではいられない筈であります。仮にその無関心なロータリアンがたった一人ではなくて、千人も万人もあったと考えて見て下さい。もし、仮に、80万の全ロータリアンの中に、9人に1人の割合で無関心なロータリアンが居たとしたら、その数は9万人にも達します。そんなに沢山の無関心な者がいたとしたら、ロータリーは忽ち壊滅してしまうであります。

今私は、全世界80万のロータリアンは一人残らず献身的ロータリアンでなければならぬ筈だと申しました。しかし現実には残念ながらそうではありません。早い話が、あなた方のクラブにも一人や二人の無関心な会員がおられるのではないのでしょうか？もし間違っていたら幸いです。私の暴言をお詫び致します。しかし大多数のクラブでは残念ながらそれが事実であります。無関心な会員が一人もいなくなるようにするのが、クラブ奉仕の最も大切な目的の一つであります。少なくとも、その数を少しでも少くすることに努めるのがクラブ奉仕の重要な目的であります。いくら会員を増やしても、その中から沢山の無関心な会員が出来るのでは、ザルの中に水を入れるようなものであります。

扱て、今日の講演の題名は「献身的ロータリアン群像」でありますから、今の論法から申しますと、80万有余の全世界ロータリアン全員についてお話ししなければならない理屈になります。しかし、そんなことが出来よう筈はありません。第一、私自身が、世界中のロータリアンの中の1パーセントすらも個人的に知っている訳ではありません。ですから、私がこれから申し上げようとしているのは、ボートの例で申せばコックスとか整調とかに当る、ひと握りの献身的ロータリアンについてであります。残念ながら、それしか出来ないのです。唯、呉々も申し上げますが、ロータリーのために献身的に奉仕した人々は、決して今日これから私が申し上げる人達だけではないのだというのを、しっかりと念頭に置きながら、これか

ら申し上げる人々についての話を聞いて戴きたいと思っております。

ロータリーの創始者ポール・ハリスについては既に多くが語られておりまして、遍くロータリアンに周知されていると思っております。そのみならず、もしポール・ハリスについて申し上げるとなると、それだけで時間が無くなってしまおうであります。そんな訳で、今日はポール・ハリスには触れないことに致します。

ポール・ハリスと云えば直ちに連想されるのはチェス・ペリーであります。1910年に、既にそれまでに米国内に出来ておりました16のロータリークラブが、シカゴに集まってロータリークラブ全国連合会を作りました。この時選ばれて、この全国連合会の幹事になったのがチェス・ペリーであります。今日の事務総長に当ります。

その後、同じ年にカナダのウィニペグにロータリークラブが出来て、ロータリーは始めて国際的になったのでありますが、次の年には更にアイルランドのダブリンとベルファストに、続いて英国のロンドンに、相次いでロータリー・クラブが出来て、ロータリーは愈々国際色を濃くしたのであります。その結果、1913年には定款が改正されて、その名もロータリークラブ国際連合会と改められました。ロータリーはその後も引き続き世界各地に拡がって、フィリピン、中華民国、インド、アルゼンチン、スペイン等にクラブが出来、1920年には愈々わが国にも最初のクラブが東京に出来たのであります。このようにしてロータリーは愈々全世界を舞台とするようになりましたので、1922年にはその名もそれにふさわしい、今日の国際ロータリーという名称に改められたのであります。

チェス・ペリーはその間引続き事務総長の職に在りまして、1942年に隠退するまで実に32年という長い間ロータリーの事務局を主宰したのであります。国際ロータリーの組織が現在の姿にまで完成されましたのは、全くチェス・ペリーのお蔭だと云っても決して云い過ぎではありません。彼の業績を知るすべてのロータリアンが、彼の功績を絶讃するのも寔に当然と云わなければなりません。ポール・ハリスは、その右腕ともいふべき存在であったこのチェス・ペリーについて、屢々次のように人に語ったと伝えられております。即ち、“もしも私が本当に国際ロータリーを作った設計

者と呼ばれるに価するとすれば、チェス・ペリーはそれと同じように本当に、国際ロータリーを建設した建築者と呼ばれるに価する。”と云ったということでもあります。

チェス・ペリーが1942年に事務総長の職を辞するに当って、国際大会は彼に終身名誉事務総長の称号を贈りたいという申入れを致しました。しかし彼は：“私は既に32年の長い間事務総長の職に携った。その間私は事務局の仕事に忙殺されて、残念ながら一人のロータリアンとしての奉仕に専念することが出来なかった。私はこの事を、皆さんに対して大変申し訳ないと思っている。それ故、これから先は一ロータリアンとしてロータリーの奉仕に専念することを、どうか許して戴きたい。”と、こう云って、この称号を固辞したのであります。

ロータリーのために、今日のゆるぎなき基礎を築き上げた偉大なる功績もさることながら、その職を去るに当って吐露した、この謙虚な、崇高なまでに尊い、ロータリーの奉仕第一の信念こそは、最大の讃辞に価するものと思います。

チェス・ペリーと同じ頃にロータリーに身を投じた人に、アーサー・シェリドンがあります。彼は皆さんもよくご存じのように、“最もよく奉仕する者は最も多く報いられる”という、あの標語を、始めて国際大会において提唱した人です。その後彼は、この標語の精神を普及徹底させるために、撓まざる努力を続けて、偉大なる足跡を残したのであります。ビジネスと奉仕の相互関係についてのこの人の考え方は、単にロータリーの世界において大きな影響を齎したばかりでなく、この考え方の熱心な信奉者達が組織した講演会や研究会などを通じて、広く一般世人の間にも大きな影響を与えたのであります。

しかし、アーサー・シェリドンについては、わが国でもロータリアンの間に比較的よく知られているようでありますから、これ以上詳しく申し述べることは省略させていただきます。

第7代 R. I. 会長アーチ・クランプの名は皆さんも近頃時々耳にされると思います。と云うのは、ロータリー財団のために大きな功績のあったロータリアンに授与するために、数年前に創設された賞がありますが、この賞に彼の名前が付けられてアーチ・クランプ賞と呼ばれることになっているからであります。この賞に彼の名前がつけられましたのは、この人が R. I. 会長であった1916

年度に始めてロータリー財団の構想が生まれたからであります。

しかし、ロータリー財団が実際に活動を始めるまでには、その後約30年かかったのであります。即ち1947年に、ポール・ハリスが亡くなった時に、全世界のロータリアンの間から、何か有意義な、永続的事業を、ポール・ハリスを記念するために起こそうではないかという声が一斉に起ったのでありますが、これが契機となって、それまで、いわば眠っていたロータリー財団に対する寄附が具体的に始まったのであります。しかしながら、その寄附も、財団としての活動も始めの中は微々たるものであります。それが今日皆さんがご存じのように、財政的援助の面においても、また財団としての活動の面においても画期的に活発になる端緒となりましたのは、1967年に東ヶ崎潔君が R. I. 会長に指名されることが決定したことであつたと、私は思っております。このニュースがわが国に伝わりますと、わが国最初の R. I. 会長の年度を、なんとかして長く記録に残るような、記念すべき年度にしたいという考えがわが国のロータリアンの間に、誰からともなく湧き起つたのは当然であります。たまたま東ヶ崎会長の年度にガバナーになるわが国のガバナー・ノミニエの一部の人達の間には、“ロータリー財団に対する財務的支援を強力に展開して、東ヶ崎会長をバックアップしようではないか”という声が起こりまして、これがきっかけとなって東ヶ崎会長の年度、即ち1968年度にはわが国からの財団寄附が爆発的に躍進したのであります。そして、この年度を皮切りとして、その後もわが国からの財団寄附は鰻登りに増大し始めたのであります。それだけではありません。それから数年後には諸外国のロータリアン達も、わが国の驚異的な財団支援に刺戟されたのでありましょくか、次第にその財団支援が増加の一途を辿りまして、遂に今日のような、全世界に亘る盛大なロータリー財団支援の活動が展開されるに至つたのであります。この意味で私は、わが国ロータリアン達の財団支援の熱意が遂に全世界のロータリアンを動かし、その結果全世界に亘る財団支援の上昇を誘発したのだと云つても、決して云い過ぎでもなければ、自惚れでもないと思っております。

アーチ・クランプ会長の時代には、先程も申しましたように、単にロータリー財団の構想が生ま

れただけで、その構想が細々ながらも現実に具体化されたのはそれから30年も遅れ、また、愈々活発に活動するようになったのは、それから更に20年も遅れたのではありますけれども、ロータリー財団の活動が、今日これほど大きな貢献を、広く国際理解増進の上に齎していることを考えますと、最初にこの構想をロータリーに導入したアーチ・クラブの名は永久に忘れてはならないと思います。

次に申し上げたいのは第8代R. I. 会長レスリー・ピジョンであります。この人は、かのラドヤード・キプリングが、“ジャングルの法則”と題する詩の中で述べた、“群れの力は狼である。そして狼の力は群れである”という有名な一句を巧みに引用したスピーチによって、ロータリー・クラブの活動とロータリアン個人の活動との間の相関関係について論じたのであります。その所論によって、その当時激しい論争的になっていた、この両者の活動の中いずれを採りいずれを捨てるか、或はいずれを主とし、いずれを従とすべきかの論争に最も明快な結論を下してロータリアンの蒙を啓いたことは特筆に価すると思えます。

敢て蛇足を加えて補足説明を致しますと、キプリングの詩の意味は、「ジャングルの中で狼の群れに遭遇することは、旅人に取って常に恐怖の的であるが、それは狼の群れの襲撃力が物凄いからである。その狼の群れの襲撃力は結局一匹一匹の狼の襲撃力の結集である。同時にまた、狼一匹一匹の強烈な襲撃力は群れを後楯にしているからである」と、こういうことであります。ロータリーの奉仕の主体はクラブであるべきか、それとも一人一人のロータリアンであるべきかの疑問に対して、キプリングの詩の中にある“狼と群れ”の比喩を巧みに引用して、まことに明快な回答を与えたものと云うべきであります。

この、レスリー・ピジョンのスピーチに現れた考え方は、今にして思えば、ロータリーの奉仕の基本的考え方として、今日では既に確立されている考え方の先駆となったものと云えるのでありましょう。

以上申し述べた人々はいずれも今から60年以上前の人々であります。第一次世界戦争以後の人々になりますと、まず最初に申し上げなければならぬのは第14代R. I. 会長ガイ・ガンデーカーであります。ガンデーカーは“Talking Knowledge of Rotary”と題する、ロータリーの基本を説いた

書物を著したことと、もう一つは、彼は職業道徳の高揚普及に努めた人でありますが、自分の属するレストラン組合のために職業上の倫理訓を書きおろしたのが他の業界からもモデルとされて、それぞれその業界の職業倫理訓をこれに倣って作ったという、二つの事柄によって、単にロータリーの内部においてのみならず、職業というものの考え方について、広く世間一般の人達にも大きな影響を及ぼした人であります。このような意味で、ガンデーカーの功績は、先程申しましたアーサー・シェリドンの功績にも匹敵するものだと云ってもよいと思います。彼の著書“Talking Knowledge of Rotary”は、「ロータリー通解」と題して日本語にも訳されております。千草会の小堀憲助君の訳で東京田無ロータリークラブから出版されたものであります。東京のロータリー文庫にも一冊備えてありますので、ご上京の機会がありましたら、是非ご一読をお勧め致します。大きな活字で60頁余りの小冊子ですから2、3時間あれば通読出来ます。

第27代R. I. 会長ウィル・メーニア・ジュニアという人があります。この名前をご存じのロータリアンは案外少ないのではないかと思います。決議23—34という有名な決議のあることは、ロータリアンなら恐らく知らない人はあるまいと思えます。この重要な決議23—34を、ほとんど一人で書き上げたことと云ってもよいほど、この決議の起草に心血を注ぎ、その成立に大きな貢献をしたのがこのウィル・メーニア・ジュニアであります。彼が会長になったのは1936年でありますが、決議23—34が採択されたのはそれより13年も前の1923年のセントルイス大会であります。その時ウィル・メーニアはこの大会の決議委員長だったのであります。

決議23—34がロータリーの社会奉仕に関する基本方針を示すものとして非常に重要であることは皆さんよく御承知と思えますが、この決議の第一パラグラフには次のように書いてあります。

“根本問題としてロータリーは、自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感及びそれに伴う衝動との間に起る争いを和解させようとする人生の哲学である。この哲学は、奉仕即ち‘超私の奉仕’の哲学であり、‘最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる’という実践倫理の原理に基いている”と、このように

書いてあります。これについてロータリー・モザイクの著者、第50代R. I. 会長ハロルド・トーマスは次のように書いております。

“この決議の第一パラグラフを、これよりもより良く書き改めることは、恐らくわれわれの中、誰一人としてこれをよくする者はあるまい”と、このように書いております。

今から半世紀以上も前に決議されたこの決議23-34がその後、若干の辞句の修正は加えられたとは云え、その大綱についてはほとんど何等の変改も行われることなしに、今日に至るまで社会奉仕の金科玉条とされているのを見ても、これをほとんど一人で書き上げたウィル・メニアの功績は、いくら讃えても讃え過ぎることはないと思います。

次に是非申し上げなければならないのは、第39代R. I. 会長サー・アンガス・ミッチェルであります。この人がR. I. 会長を勤めたのは1948年から1949年に至る年度であります。1949年と云えば第2次世界戦争後、わが国がロータリーに復帰を許されて東京ほか七つのロータリークラブが二度目の誕生をした年であります。その前の年のR. I 会長は、昨年11月に亡くなったケン・ガーンジイであります。この人もまたアンガス・ミッチェルと共に、わが国ロータリアンとして忘れてはならない人であります。と、申しますのは、わが国のロータリー復帰は、ガーンジイ会長の努力に始まり、ミッチェル会長の仕上げによって実を結んだと云うことが出来るからであります。

アンガス・ミッチェルについてポール・ハリスは曾て次のように云ったと伝えられております。即ち、“アンガス・ミッチェルは、私が、いつかはR. I. 会長になって貰いたいと思っている人だ”というのであります。アンガス・ミッチェルはそれほど理想的なロータリアンであり、ロータリーのために生まれて来たような人だと云われた人です。不幸にして、このポール・ハリスの念願はポールの生前には実現しませんでした。アンガスを識る人は皆彼を典型的ロータリアンとして、口を極めて褒めない者はありません。

ケン・ガーンジイについてはもう一つ忘れてはならないことがあります。ガバナーをやったことのある方は皆さんよくご存じの国際協議会—以前はレークプラシッドで開催されておりましたが、数年前からボカラトーンに場所が変わった、あの、ガバナー・ノミニーが必ず出席することを義務づ

けられている重要な会合であります。この国際協議会というのは、皆さんも多分ご存じのように、ガバナー・ノミニーにガバナーとしての教育訓練を施すことを主眼とする会合であります。レークプラシッド時代からボカラトーン時代に至るまで一貫して、毎年必ずその会場の入口に掲げられている標語があります。それは“Enter to Learn—Go Forth It Serve”、即ち「来りて学び—出でて奉仕せよ」という、すばらしい名文句であります。この名文句は、ガバナーの経験を持つ人達が、恐らく終生忘れることの出来ない国際協議会の印象と共に、深くその脳裡に刻みつけられていると思いますが、この標語を発案して最初にこれを国際協議会の入口に掲げることにしたのが、このケン・ガーンジイだったのであります。

ケン・ガーンジイはまた、友情—Friendship—を何よりも大切なものと考えた人です。彼は：“友情こそロータリーのすべてを支配し、ロータリーの行なうすべてを律する”と申しました。奉仕こそロータリーの理想であります。その奉仕すら友情の基盤の上に築かれなければ本当のロータリーの奉仕とは云えないと、彼は云うのであります。友情というものは、それほどロータリーにとって大切なものであるというのが彼の考え方です。ポール・ハリスがロータリーを創設するに至ったのもその発端はと云えば、友情を求めてやまないポールの心根にあったことを思えば、このガーンジイの考え方こそ、最もロータリーの正統派に属する考え方だと云うべきでありましょう。

第53代R. I. 会長ニティッシュ・ラハリーと第57代R. I. 会長リチャード・エバンスの二人は、皆さんの中にもよく覚えていらっしゃる方が多いと思います。二人ともR. I. 会長の時、その公式訪問として九州にも来たことがあるからであります。ラハリーは1962年度、またエバンスは1966年度のR. I. 会長であります。この二人に共通して云えることが一つあります。それは、この二人が、会長の任期を終って後、幾何もなくしてこの世を去ったということであり。もっともラハリーは会長退任の翌年の7月に、またエバンスは退任後4年目の11月にこの世を去ったのでありますから、二人の間には3年余りの相違がありますけれども、二人共事実上ロータリーのためにその命を捧げたと云っても間違いではないという点で

共通点があると私は思うのであります。

ラハリー会長は元々あまり頑丈な体ではありませんでした。R. I. 会長の仕事は頑丈な人にとっても大変な激職であろうということは、われわれにも容易に想像できます。彼はそれを重々承知の上で、敢てこの大任を受諾してその生命を捧げたのであります。ラハリー令嬢は、“父はロータリーに殺された”と云ったとか聞き及びますが、ラハリー自身は恐らく“本望だ”と思って従容としてこの世を辞したに違いないと私は思っております。

また、リチャード・エンバンスはその晩年、モルモン宗の12人の使徒と呼ばれる最高幹部の一人に選ばれましたが、この役目は非常に激職だと聞いております。それにも拘らず、彼は現職のまま、R. I. 会長の任を喜んで受諾したのであります。そればかりではありません。彼はモルモン宗の最高幹部に任ぜられるずっと以前から、長年の間毎週日曜の朝、米国全土にラジオ放送されていたタバナクル・クワイヤーという、モルモン宗所属の大合唱団の放送のインターヴァルに、5分間の説教を行なって大変高い聴取率を示しておりました。彼はこれを亡くなるまで一回も欠かしたことは無かったのであります。

R. I. 会長の年度には勿論彼も世界各地のロータリークラブを公式訪問したのでありますが、そんな時には必ず出発前に、留守中に放送される分をあらかじめ録音しておいて留守中の義務を果たしたのであります。

また聞くところによりますと、少しでも多くのロータリアンに接したいという配慮からも、また、全ロータリアンの会費によって賄われるR. I. の経費を少しでも節約したいという配慮からも、公式訪問の日程は寸刻を惜んで計画され、各地への到着も各地からの出発も、原則としてすべて早朝の時間を選んであったということでもあります。そのために、どうしても避け難い睡眠時間の不足は、空を飛んでいる間に飛行機の中で補うというほどの強行ぶりであったということでもあります。

頑健とは云えないまでも、会長就任まで病気のしい病気をしたことのないエバンス会長が、会長の任期を終って僅か四年余りで亡くなったについては、恐らく会長時代のこのような過労が累積した結果であったろうと私は思うのであります。

以上、「献身的ロータリアン群像」と題しながら、

対象としたロータリアンの大部分は曾てR. I. 会長を勤めた人々という結果になってしまいました。限られた時間で限られた為の人々について申し上げるとすれば、このような結果になるのもやむを得ないことであろうと、御理解を頂いて、お許しを願いたいと思います。

しかし、繰り返して申し上げたいのは、ロータリーの今日あるのは、決してR. I. 会長その他、国際ロータリーの中枢に在って采配を揮った人達だけの力ではないということでもあります。これらの人々のほかにも何万、何十万とも数知れぬ献身的ロータリアン——つまり、あなた方のようなロータリアンが、全世界到る処にあって、年々歳々、入れ替り立ち替り、ロータリーのために全力を捧げて、ロータリーが少しでもより良く、より多く、世のため人のために、お役に立つようにつとめることによって、ロータリーをして今日あらしめているのであります。——ちょうど、大小、種々様々な形の木片が寄り集まって、見事なモザイク模様を造り出すように——大きな木片は大きな木片として、小さな木片は小さな木片として、また円い木片は円い木片として、三角の木片は三角の木片として、それぞれその分に応じ、適性に応じて、役目を果たしているのであります。

われわれロータリアンもこれと同じように、一人一人、その分に応じ、適性に従って、お役に立ち得るのでありますから、一人としてロータリーにとって、いてもいなくてもよいロータリアンはいないのであります。どうか皆さん、もしも自分一人がロータリアンとしての任務を怠ったとしたら、ロータリーのモザイクは自分の所だけポッカリ穴があくのだという自覚をもって、ロータリーのために身を献げようではありませんか。そうして、ロータリー・モザイクの一片となり得ることに、誇りと喜びを持とうではありませんか。

記念誌結びのことは

会長亀井さんを中心とする役員の方方から、期報の代りに、20周年記録誌をあてるよう、又、記録誌は、松本元R. I. 理事の特別記念講演を重点にして編集するよう御指示をうけました。ここに記録誌を完結して、クラブの歴史の一こまを記録する仕事にたづさわったことを喜びと共に感謝いたします。記録誌 委員一同、(正)朝比奈澄麿(副)塩山栄一 藤井宏樹 稲田誠一